



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和元年5月31日
令和元年度
第3号

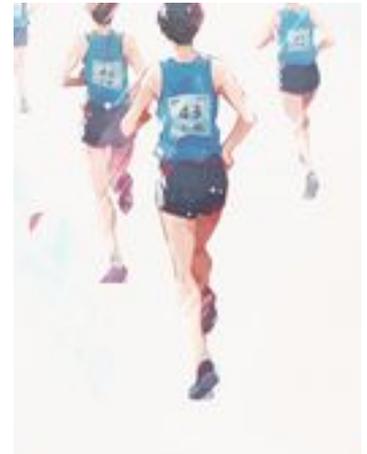
自分が乗り越えなければならない事

校長 本田 哲朗

令和になって初めての記録更新は、どうやら気温の事になりそうである。連日5月ではこれまでに無かった猛暑の報道を耳にしているが、そんな中、25日には一貫強歩が猪苗代湖畔半周のコースで実施された。中学1年生から高校3年生まで全生徒での実施であった。

当日はスタートからゴールまで雲一つない、一生に一度あるか無いかの晴天だった。しかし、猛暑とは裏腹に、むしろ爽やかささえ感じられた。神ならぬ猪苗代の標高が味方し、誰一人脱落する事無く、無事終了出来た事をこころから嬉しく思った次第である。

ところで、長さ故に心配された連休明けに始まった高校総体では、いままでにない運動部の活躍があった。私も5つの競技の応援に出向いたが、どの競技でも本校生徒の活躍に心が揺さぶられた。これまでに精進した事が試される本気の戦いは、観る者を魅了する。尽き詰まるどころ、対戦相手の別なく、人間対人間の勝負なのだ。しかし、それにとどまらない種目もある。中でも特にストイックな典型は、陸上競技や水泳競技だろうか。どの種目も人との勝負の先に、必ず先人が打ち立てた記録がそびえ立っている。人と競うのはあくまでも過程で、最終的には記録(時間の刻み)との勝負なのだから本当に凄いと思う。



反面、多くのスポーツは技の競い合いが主流になる。だから個人の鍛練は勿論、チームワークが試される。また、この事に誠心誠意青春を掛けるのは十分に意義と価値がある。だから、勝者になって欲しいと願うのと合わせ、それを通じ様々な事を学んで欲しいのだ。その中で特に思う事は、勝負の鉄則についてだ。対戦相手は決して自分に合わせてくれない。勝ち負けが明白な事には必ず相手の存在があるが、勝負の厳しさを煎じ詰めると、相手が自分の基準や発想、準備のレベルに合わせてくれない事だと思うのだ。その総合でわずかでも勝った方が勝者になる。これが勝負だ。解り切った事とは言え、そんな事を考えながらの観戦だった。

実は、これは社会通念にも当てはまる。何を行うにも勝負にはこの事が必ず付きまとう。思うに、中・高時代の部活で学ぶのは、対戦相手が自分に合わせてくれない事だと思う。また、結果として敗者なら、屈辱的な悔しさをバネに、次は勝者になる為の努力をする事を学ぶのだ。

自分の事を少し話したい。若い頃に自然科学を学んだが、高じて自然に親しみを覚え登山にのめり込んだ。初めに奉職した高校では、廃部だった山岳部を起し、男女混合十名にも満たない部を再生し、我が国の三千メートル級の山も沢山挑戦させた。そんな中、常に口にした事は山のレベルに合った、鍛練の必要性についてだ。言うまでも無く、自然が相手では、当然人の都合に合わせてくれない。従って力不足の時には逃げ帰るしか無いのだが、それでもと思うのなら、そのレベルまで鍛えなければならない。受験も同じである。万事が万事…当たり前の事だが、これが中々出来ない。きっと出来る人が勝者になっているのだと思う。